

小島なお

奥村俊哉さんの作品は、都市を荒野のように詠い、一陣の言葉の風を広大な空間に自在に吹かせて います。

ビル街というオカリナに秋の風

関朱夏さんの作品は、自らの心や体を差し出しながら、つねにここではない向こう側の果てを希求しているよう。気に入つた文字と／ひとつになれたらな／仰向けて上目遣いで 弓

大橋弘典さんの作品は、助詞の効かせ方、言葉同士の斡旋に独創的なセンスが光っています。

坂／降りる へつらうこともない春は

桜伸太郎さんの作品は、現実を虚構へ、虚構を現実へ落とし込むテクニックの華麗さに魅了される。表記も周到。目の前のくつしたを雲が／超えるまで／肉体をキヤンセルして いたい

折田日々希さんの作品は、肥沃な詩的土壤がどの作品にも感じられ、ひとつの詩の背後に一冊の物語が展開されるよう。

父親が／高野豆腐を／日没のように食べてて／雨に似る箸松下誠一さんの作品には、平坦に見える日々に出現する時空のきりぎしを見る思いがします。

セブンティーンアイスの／グレープシャーベット／自死からいちばん遠いところに

白野実悠さんの作品は、自分と他者の、内側と外側の未分化な透徹した世界観がすがすがしい。

シャンプレーのゆびさき 星の／まんなかでひかりになつて いる／さがしてよ

中矢温さんの作品は、俳句の韻律をスプリングボードにしてきらびやかに毒を散りばめています。

ピーナッツバター馬鹿ばつか

吉沢美香さんの作品は、物事の本質にある不気味さを愛を込めて掬つてゆきます。

缶詰めの肉寄つている雪催い

吉富快斗さんの作品は、古典的な語句の雅な手触りを生かしながら、上質で抑制された心を披露してくれる。金琵琶を煩く感ずる日があつて

清水将也さんの作品は、現代を生きる精神のなまなましさを衒いなく、平熱で感じさせる。

誤差なんだ青い瞳に生まれず／夏を黙つて生きてることも

豊富瑞歩さんは口語詩句奨励賞にも選出されています。刻々と失われてゆく今のとりとめのなさを少し寂しい口語で慰める。

もう帰るしかない時間の歩き方／昼に見たアゲハ蝶はよかつた

伊藤万由子さんの作品は、「あなた」や「君」や「母」との閉じた関係性の濃さに比例するよう隔たつていてる〈外側〉への目線が印象深い。

2番出口の階段を上る間の感情／だけ連ねた日記

小笠原風花さんの作品は、過去や未来にまつわるあらゆる感情を肯定しようとする信念に読者の信念までも導かれるよう。

雲は水蒸気だから寝転べないよ／と言うだけの簡単なお仕事です

森山ひかるさんの作品は、人に物事にほんのひとときしかない純な時間を護るように詠う。「これから」は無条件に尊い。

保育士の姉は／その言靈はよかつたかな？／と叱つている
平間悠之介さんの作品は、すべての言葉が持つ表層的な意味や、その意味に容易に動かされてしまう人の心に搖さぶりをかけてゆきます。

ひとはみな／なんて今では言えないね／逢坂の関も壊されちゃつたし